

近代語における外来語略語の形成

On the Word Formation of Loanword Abbreviations in the Modern Japanese Language

余 澤 涛

SHE, Zetao

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第50号 2020年12月 抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.50 2020

近代語における外来語略語の形成

余 澤 涛

1. はじめに

本稿は明治・大正期（1868～1926年）、昭和前期（1926～1945年）を含む近代において外来語略語の形成を調査し、分析したものである。時代が変わるとともに、略語の造語法も変わっていくと考えられる。そのため、早い時期に造られた外来語略語の形成は現代と異なるであろう。そこで、本稿は近代において造られた外来語略語の語例を注目し、その形成について分析を行いたい。

本稿は二つの部分で構成される。一つは語例調査である。もう一つの部分は語例調査に基づいて、語例の形成上の特徴を分析することである。異なる時期で出版される外来語辞書、新語辞書、流行語辞書などを中心に外来語略語の語例を抽出し、分類を行った。分類について、まず、余（2019）に従い、一語で構成される外来語（「セメント」の類）を単語型外来語とし、二つ以上の語が構成する外来語（「ガイド・ブック」の類）を複合語型外来語とする^{注1}。単語型外来語が略語化して形成したものを「単語型略語」と呼び、複合語型外来語の略語を「複合語型略語」と呼ぶことにする。さらに、略語化過程における保留する部分によって「単語型略語」を「前部保留型」と「後部保留型」に、「複合語型略語」を「前単語保留型」、「後単語保留型」、「前後結合型」と「部分抽出型」に分ける^{注2}。

記述を簡潔するため、略語の語例を「セメント」、「ガイド・ブック」のように書くことにする。大文字の部分は略語化において保留されるものであり、小文字の部分は削除されるものである。略語化を「セメント→セメン」、「ガイド・ブック→ガイド」のように「→」で表す。音節の符号を「σ」とし、モーラの符号を「μ」とする。

さらに、本稿において、「原語」という用語は略語の外国語語源を指し、「原形」は「略語形」の元の形であるカタカナ語を指している。「アジテーション」という略語を例にして説明すると、「アジ」は略語形であり、「アジテーション」は原形である。カタカナ語「アジテーション」に対応する＜英語 agitation＞を原語と呼ぶことにする。

^{注1} 外来語略語の分類について、先行研究の田辺（1988）は外来語略語を単語型と複合語型に分けている。単語型の語例は前省略型、中省略型、後省略型があり、複合語型の語例は前省略型、中省略型、後省略型、前後省略型、頭文字型がある。

^{注2} 単語型略語と複合語型略語の分類について、第4節と第5節で詳しく述べる。

2. 語例収集

語例を収集するため、できるだけ多くの辞書を使用した。辞書の出版年を「アルファベット+数字」の形で書くことにする。例えば、「明治22年」を「M22」、「大正3年」を「T3」、「昭和3年」を「S3」で表示する。使用した辞書の書誌情報は以下のものである。

- (1) 明治・大正期出版の辞書：①大槻文彦編『言海』（大槻文彦、1889（M22）～1891（M24）年）
 ②山田美妙著『日本大辞書 全第六版』（明法堂、1893（M26）年） ③棚橋一郎・鈴木誠一著『日用舶来語便覧』（光玉館、1912（M45）年） ④勝屋英造編『外来語辞典』（二松堂書店、1914（T3）年）
 ⑤時代研究会編『現代新語辞典』（耕文堂、1919（T8）年） ⑥上田景二編『模範新語通語大辞典』（松本商会出版部、1919（T8）年） ⑦小林鶯里編『現代日用新語辞典』（文芸通信社、1920（T9）年）
 ⑧自笑軒主人著『秘密辞典』（千代田出版部、1920（T9）年） ⑨小林花眠編著『新しき用語の泉』（帝国実業学会、1922（T11）年） ⑩紅玉堂編集部編『活用現代新語辞典』（紅玉堂書店、1924（T13）年）
 ⑪素人社編『現代語辞典』（素人社、1924（T13）年） ⑫秋山湖風・太田柏露編『最新現代用語辞典大正14年版』（明光社、1925（T14）年） ⑬服部嘉香・植原路郎著『新しい言葉の字引大増補改訂版』（実業之日本社、1925（T14）年）
 ⑭上田由太郎『英語から生れた新しい現代語辞典』（駿々堂出版部、1925（T14）年） ⑮新語研究会編『新しい言葉は何でもわかる』（ヤナセ書院、1926（T15）年）
- (2) 昭和前期出版の辞書：⑯竹野長次監修・田中信澄編『音引正解近代新用語辞典』（修教社書院、1928（S3）年）
 ⑰モダン辞典編輯所編『モダン辞典』（弘津堂書房、1930（S5）年） ⑱新井正三郎著『現代語新辞典』（新井正三郎自治館、1930（S5）年）
 ⑲東亜書院編輯所編『現代新語辞典』（東亜書院出版部、1930（S5）年） ⑳現代編輯局編『現代新語辞典』（大日本雄弁会講談社、1931（S6）年）
 ㉑鶴沼直編『モダン語辞典』（誠文堂、1932（S7）年） ㉒中目覚『外来新語辞典』（博多成象堂、1932（S7）年）
 ㉓伊藤晃二著『常用モダン語辞典』（好文閣、1933（S8）年） ㉔辞書刊行会編『現代新語大辞典』（秀文社、1935（S10）年）
 ㉕新潮社編集部編『現代新語小辞典』（新潮社、1936（S11）年） ㉖新語研究会編『現代常識新語辞典』（大洋社出版部、1938（S13）年）

略語を認定する基準は辞書の説明とする。「(…は) …の略語」や「(…) は単に…とも言う」のように明確な記載がある語例を略語であると認定した。

- ・ノート..手控、書附 Note (英) 記號標註註釋等、ノートブックの略言。又紙幣の事にも用ふ。
- ・フロックコート..普通禮式洋服Frock-coat (英) 洋服の中上衣の長き仕立にして普通禮服なり單にFrock (フロック) とも云ふ。

以上の「ノート」と「フロックコート」の説明は明治末期に出版された日本初の外来語辞典『日用舶来語便覧』から引用したものである（波線は筆者によるもの）。このような記載は明確であり、このように記載される語例は略語であると認定した。ただし、本稿はカタカナのみで構成される外来語の略語化を調査対象としているため、二つ以上の語種で構成される略語（「ニコチン中毒→ニ

コ中」の類)や英文字のみで構成される略語を排除した。

明治・大正期の辞書から抽出した殆どの語例は明治・大正期に造られたと考える。昭和前期の辞書から語例も収集したが、その中で明治・大正期において既に存在した語例もある。そのため、明治・大正期に既に存在した語例を抜き出し、残った語例は昭和前期において新たに出現した外来語略語であると考えられる。

3. 原形と不对応の略語

略語語例の中で、「原形と不对応の略語」が存在する。「ダイヤモンド→ダイヤ」、「ブランケット→ケットー」や「アンコアー・エスケープメント→アングル」などはその例である。これらの略語は原形のない要素を持っており、その形成も色々な原因がある。そのため、略語の形成における様々な規則を分析する前に、まず本節をもって「原形と不对応の略語」形成を説明したいと考える。

3.1. 単語型略語の「原形と不对応の略語」

明治・大正期の辞書から収集した語例は「エレクトリシチー→エレキ」、「キューピット→キューピー」、「ゴシック→ゴチ」、「ダイヤモンド→ダイヤ」、「ダイアグラム→ダイヤ」、「ハンカチーフ→ハンケチ」、「ハズバンド→ハス」、「ブランケット→ケットー」、「メッセル→メス」、「メツサー→メス」、「グリセリン→リスリン」、「ローラー→ロール」の12例がある。

昭和前期の辞書に初出した語例は「インテリゲンチャ→インテル」、「ヴァンパイア→ヴァンプ [ヴァンパイア→ヴァンプ ヴァムパイア→ヴァムプ ヴァンパイヤー→バンブ]」、「オルガナイザー→オルグ」、「カツチング→カット [カツティング→カット]」、「キッティー→キット」、「コミッション→コム」、「サディズム→サディー」、「スクラメージ→スクラム [スクラメーヂ→スクラム]」、「スケーティング→スケート」、「セレニウム→セレン」、「チンクチュア→チンキ」、「センチメンタル→センチ」、「ディミニューエンド→ディム」、「テナリスト→テナー」、「ドラー→ドル」、「パノラミク→パン」、「マンガニーズ→マンガン」、「レジスウエル→レヂー」の18例がある。

以上の語例において、略語形はその原形が持たない要素を持ち、原形との不对応がある。この現象について、以下のような原因が考えられる。

(一)、原語をカタカナ語にする時に、表記がゆれたため複数の表記があるもの。「ゴシック→ゴチ」、「ダイヤモンド→ダイヤ」、「ダイアグラム→ダイヤ」、「ハンカチーフ→ハンケチ」、「ハズバンド→ハス」、「グリセリン→リスリン」、「センチメンタル→センチ」などは外来語表記の揺れという原因で造られたと考える。

例えば、＜英語 diamond＞は日本語に輸入された際に、「ダイヤモンド」、「ダイヤ」などに表記され、カタカナ語表記の揺れが生じた。その中で、「ダイヤモンド」は略語化され、「ダイヤ」に略された。「ダイヤ」は「ダイヤモンド」の略語形として定着し、＜diamond＞が表す金鋼石を

意味する。そのため、「ダイヤ」という語は自然に「ダイヤモンド」の略語形にもなったと考える。

同じように、「グリセリン」と「グリスリン」は<独語 glycerin>のカタカナ表記の揺れである(『日本国語大辞典 第二版』(小学館、2000~2002)の「グリセリン」項目において、「グリセリン」と「グリスリン」両方が見られる)。そのため、「グリセリン→リスリン」という語例形成も表記の揺れと関わっている可能性がある。

「センチメンタル→センチ」において、原形「センチメンタル」は<英語 sentimental>から由来するものである。しかし、<sentimental>は「センチメンタル」でも「センチメンタル」でも表記されており、カタカナ語表記の揺れが見られる。そのため、「センチ」は「センチメンタル」の略語形になったと考える。

(二)、原語にそもそも省略形のあるもの。外国語の中でも、略語が存在する。一部の「原形と不対応の略語」は外国語略語をそのまま転写したものであると考えられる。例えば、「ヴァンパイア→ヴァンプ」において、原形の「ヴァンパイア」は<英語 vampire>から由来し、妖婦の意味を表す。英語の中で、<vampire>は<vamp>に略されている(岡倉由三郎『新英和大辞典』(研究社、1940)^{注3}の「vamp」項目を参照)。そのため、略語「ヴァンプ」は英語略語<vamp>を転写したものであると考えられる。

「スクラメージ→スクラム」において、原形「スクラメージ」は<英語 scrummage>から由来し、ラグビー用語の一つである。『井上英和大辞典』(井上辞典刊行会、1925)^{注4}はこの英語について「(Rugby footballにて；通常 scrummage, 又 scrum と略す) 両方の前衛全部地上に毬を挟み押合ふこと」と説明している。英語の中で、ラグビー用語としての<scrummage>は<scrum>に略されることが分かる。そのため、「スクラム」は英語<scrum>を転写したものであると考えられる。

「パノラミク→パン」の原形「パノラミク」について、1930年出版の『モダン辞典』は「パノラミク(映) キヤメラを動かして、パノラマの如く撮影する事、略して「パン」と云ふ」というように説明している。略語形「パン」とその原形「パノラミク」は映画界用語であると考えられる。「パノラミク」は<英語 panoramic>から由来したものであると考える。英語の中で、<panoramic>は<pan>に略されているため、略語「パン」は<pan>をそのまま転写したものであろう。

「ディミニューエンド→ディム」の原形「ディミニューエンド」は<イタリア語 diminuendo>から由来し、音楽用語である。そして、イタリア語の中で、<diminuendo>は<dim>に略されている。そのため、略語「ディム」は恐らく<dim>を転写したものであろう。

(三)、接辞の削除によって造られたもの。「カッチング→カット」において、原形「カッチング」は<英語 cutting>に対応している。略語化過程において、接尾辞<~ing>にあたる部分が削除さ

^{注3} 『新英和大辞典』は2514ページがあり、「現代英語を主とし、新語・復活語等は成るべく遺漏なき」収録することを方針として編集された辞典である。

^{注4} 『井上英和大辞典』は附録を除き、2326ページがある大辞典であり、数多くの英語を収録している。

れたと考える。その結果、「カッティング」の略語形は「カット」(<cut>)になった。同じように、「スケーティング→スケート」において、略語「スケート」(<skate>)も原形「スケーティング」(<skating>)の接尾辞<~ing>にあたる部分が削除されて形成したものであると考える^{注5}

四、長音の追加で造られたもの。明治・大正期の語例「ブランケット→ケッター」において、「ケッター」は恐らく「ブランケット」の略語形である「ケット」が長音と結合して形成したものであると考える。昭和前期の語例においても、同じような語例が見られる。「サディズム→サディー」において、略語「サディー」は「サディ」と長音とが結合して形成したものである。語例「テナリスト→テナー」の「テナー」も「テナ」と長音とが結合して形成したものである。「レジスウエル→レザー」の形成において、表記のゆれで「レジスウエル」は「レヂ」に略された。その「レヂ」はさらに長音と結合して、略語「レザー」が造られたと考えられる。

長音の追加によって、略語形は3 μ や4 μ の長さを持つようになる。音韻上の安定性を図ることが長音追加の原因である可能性が考えられる。

五、異なる言語から由来するもの。「メッセル→メス」、「メツサー→メス」において、原形「メッセル」、「メツサー」はいずれも<独語messer>から由来するものであり、略語形「メス」は<蘭語mes>から由来するものである。「メッセル」「メツサー」と「メス」は原形と略語形の関係というより、異なる言語から日本語に輸入されたものであると考えたほうがよい。

「マンガニーズ→マンガン」について、1933年の『常用モダン語辞典』は「マンガン manganese (英) マンガニーズの略。満俺。赤味を帯びた灰色の金属元素の一」と説明している。原形の「マンガニーズ」は<英語manganese>から由来したものであると考えられる。一方、略語形「マンガン」が由来する言語について、『日本国語大辞典 第二版』の「マンガン」項目は<蘭語mangaan>と<独語mangan>と提示している。「マンガン」は蘭語か独語から由来する可能性が高い。「マンガニーズ」と「マンガン」は原形と略語形の関係を持つと言うより、異なる言語から由来した語であると考えられる。

「チンクチュア→チンキ」の原形「チンクチュア」は恐らく<英語tincture>から由来したものであろう。一方、『日本国語大辞典 第二版』は「チンキ」を「チンキテュール」の略語形として説明している。同辞書によると、「チンキテュール」は<蘭語tinctuur>から由来したものである。

3.2. 複合語型略語の「原形と不对応の略語」

明治・大正期の辞書から収集した語例は「アンコアー・エスケープメント→アンクル [アンカー・エスケープメント→アンクル]」、「オレンジ・エロー→オレンジ」、「ストライク・ボール→ストライキ」、「スペクツロ・スコープ→スペクトル」、「ステレオ・タイプ→ステロ [ステリオ・タイプ→

^{注5} 単語型略語の形成における接辞の影響について、詳しい考察は別稿に譲る。

ステロ、ステイリオ・タイプ→ステロ]」、「Smoking room→スモーク」、「スライディング・シート→スライド」、「セカンド・チャンピオン→セコ・チャン」、「セカンド・ハンド→セコ・ハン」の9例がある。

昭和前期の辞書に初出した語例は「アンダー・カッティング→アンダー・カット」、「インタナショナル・プレス・コレスポネンス→インプレコール」、「ガーダー・ブリッチ→ガード」、「クロスワーズ・パズル→クロスワード」、「スターティング・ポイント→スタート」、「ダンシング・ホール→ダンス・ホール」、「プロレタリアート・カルチュア→プロレット・カルト」、「ポリース・マン→ポリス」、「ムーヴィング・ピクチュア→ムーヴィー」、「メーカーキング・アップ→メキャップ」、「ワツシング・スタンド→ワツシュ・スタンド」の11例がある。

その形成について、主に三つの原因が考えられる。この三つの原因は3.1節の単語型略語「原形と不对応の略語」の形成原因と共通している。

(一)、原語をカタカナ語にする時に、表記がゆれたため二重形のあるもの。「アンコアー・エスケープメント→アンクル」において、原形「アンコアー・エスケープメント」は<英語 anchor escapement>から由来したものである。<英語 anchor>はカタカナ語に転写される際に、「アンコアー」でも「アンクル」でも表記され、表記の揺れが生じた。『日用舶来語便覧』は「アンクル… 錨 Anchor (英) (中略) アンコアーは錨と云ふ字なれども訛りてアンクルとなり」と説明している。辞書の説明によると、<英語 anchor>は「アンコアー」、「アンクル」に表記されていたことが分かる。そのため、「アンクル」は「アンコアー・エスケープメント」の略語になったと考える。

「セカンド・チャンピオン→セコ・チャン」、「セカンド・ハンド→セコ・ハン」において、原形「セカンド・チャンピオン」は<英語 second champion>から由来し、「セカンド・ハンド」は<英語 second hand>から由来したものである。<英語 second>のカタカナ表記は揺れが存在し、「セカンド」でも「セコンド」でも表記される。例えば、『外来語辞典』は「セカンド (Second) [英] 第二。秒 (時間)」、『現代新語辞典』は「セコンド (Second) 第二、秒びょう」、『最新現代用語辞典』は「セコンド (英) Second 第二、第二次」と書いてある。そのため、略語「セコ・チャン」と「セコ・ハン」の形成は<英語 second>の表記の揺れが原因になると考えられる。

「オレンジ・エロー→オレンジ」において、原形「オレンジ・エロー」は<英語 orange yellow>から由来した語である。<英語 orange>も表記の揺れが見られ、「オレンジ」や「オレンジ」に転写されていた。例えば、日本青年教育会編『新式農業』(日本青年教育会、1920)には「ネーブル、オレンジ」が見られ、大分県南海部郡『柑橘の栽培』(南海部郡、1920)には「ネーブルオレンジ」が見られる。表記の揺れが「原形と不对応の略語」が形成する大きな原因である。

「メーカーキング・アップ→メキャップ」において、原形「メーカーキング・アップ」は<英語 making up>から由来したものである。<making up>をその発音のままに転写すると、「メキャップ」になる。つまり、「メキャップ」は<making up>の表記の一種であろうと考える。

その他、「ストライク・ボール→ストライキ」、「スペクツロ・スコープ→スペクトル」、「ステレオ・タイプ→ステロ」、「ポリース・マン→ポリス」の形成も表記のゆれと関わっていると考える。

(二)、原語にそもそも省略形のあるもの。「インタナショナル・プレス・コレスポネンシス→インプレコール」において、原形「インタナショナル・プレス・コレスポネンシス」は<英語 International Press Correspondence>から由来し、左翼新聞紙の名前である。英語の中で、<inprecor>という略称は存在している。「インプレコール」は恐らく<inprecor>を転写したものであろう。

「プロレタリアート・カルチャー→プロレット・カルト」の略語形「プロレットカルト」は恐らく<露語 Proletkult>から由来したものであろう。

(三)、接辞の削除によって造られたもの。「スライディング・シート→スライド」において、略語「スライド」が対応するのは<英語 slide>である。原形「スライディング・シート」は<英語 sliding seat>に対応する(『日本国語大辞典 第二版』の「スライディング・シート」項目を参照)。<slide>は接尾辞<~ing>を付け、<sliding>になる。そのため、この語例の略語化を「スライディング・シート→スライディング (= sliding) →スライド (= slide)」のように考えたほうがよい。略語「スライド」の形成において、接辞による分節が略語化への影響が観察される。

同じように、「smoking room→スモーク」において、「スモーク」という略語の形成も恐らく「smoking room→smoking→スモーク」のようであろう。<英語 smoking>は<smoke>が接辞<~ing>と付けたものである。そのため、略語化される際に、接辞にあたる部分が削除され、語基にあたる「スモーク」(<smoke>)が保留され、略語形になったと考える。

その他、「スターティング・ポイント→スタート」、「ダンシング・ホール→ダンス・ホール」、「ムーヴィング・ピクチャー→ムーヴィー」、「ワツシング・スタンド→ワツシュ・スタンド」の形成過程においても、英語接辞<~ing>の削除が見られる。

以上のように、明治・大正期、昭和前期において、「原形と不对応の略語」の形成について分析した。その形成は様々な原因があり、語例を一例ずつ分析する必要がある。第4節から、「原形と不对応の略語」の語例を除き、外来語略語の形成における一般規則を考察していく。

4. 単語型略語の語例

略語化における原形の保留する部分の位置によって略語の類型が分けられる。

単語型略語の場合、原形の前部を取って略語形を造る「前部保留型」(「セル_ヅ」の類)と原形の後部を取る「後部保留型」(「_ラネル」の類)がある。

単語型略語の語例は次の頁の(3)のようなものがある。表記のゆれが存在する語例は統計上に一つの語例として数える。例えば、「インバネス→インバ」と「インヴァネス→インヴァ」という略語化は存在する。「インバネス」と「インヴァネス」は表記がやや異なるが、いずれも<英語

inverness>から由来するものである。そのため、「インバネス→インバ」と「インヴァネス→インヴァ」を同じ略語化とし、略語「インバ」と「インヴァ」を統計上に一つの語例とする。

(3) 明治・大正期の辞書から抽出したもの：

前部保留型 (56例)：アド (advertisement, advertisingの略) アルミニウム アスパラガス
 インスト (instantの略) インバネス[インヴァネス] エキストラクト[エックストラクタム、エキス (extract
 の略)、エキス (extractの略)] エレキテル エンゲージメント エスケープ[エスケープ]
 エボナイト カリウム キログラム コスメチック コンクリート コレスボンデンス コンキユウバイン
 ゴシック コンパニョー コールタール サルヴァルサン シスター シリン (cylinderの略) ジャップ[ジヤ
 ヅップ] (japan, japaneseの略) セメンシイナ[セメンシーナ] セメント セルジ[セルヂ]
 ダイヤモンド[ダイヤモント] ダイヤグラム チャンピオン[チャンピオン] トロッコ バラスト ハズバンド (ハス
 バンド) ハンカチーフ パンクチュア ピッチャー ビルディング プロステテュート[プロステチュート プロステチュート
 プロステチュート プロ (prostituteの略)] ブランデー [フランディ] フラスコ ファン (fanaticの略)
 ブルジョア[ブルジョア] プロレタリアート プロレタリア プログラム ベロリン ポリス ポプラー マントル
 マントリー ミリメートル ミステーク メモランダム[メモ (memorandumの略)] モスリン
 ランドセル レザーレット ロガリズム

後部保留型 (8例)：アルミニウム コスメチック パス (trespassの略) タイピスト フランケット[フラ
 ンケット] フランネル コンミッション ヴニス

(4) 昭和前期の辞書に初出したもの：

前部保留型 (52例)：アジテーション[アヂテーション アジ (agitationの略)] アナキズム[アナキズム]
 アジテーター アナオンサー アナキスト アパートメント インテリゲンチヤ[インテリゲンチヤ インテリゲンチヤ
 インテリゲンチヤ] エロチック[エロティック] エロティシズム エロース カツレット グラフィック[グラフィック]
 グロテスク ゲルト ゴノリニア コックスエン コンビネーション サブマリン[サブマリン] サブウエー
 サンチメートル サブステテュート シンパサイザ[シンパサイザ] スベルリング センチメンタル デマゴキ
 デマゴグ[デマゴグ] テロリズム テロリスト デモンストレーション[デモンストレーション] ドクター ネガティヴ[ネガティ
 ヴ] ハンドリング ピケツチング ピケット フォトグラフ プロフェサー プロマイド プロダクション
 プロフェクション プロバガンダ プロバビリティ ボルシエビキー ポジティヴ[ポジチヴ] マスターベーション マソヒズム
 メフェイス プロフェレス メトロポリタン モンスリーシック レポート レポーター レフレクター ロケーション[ロケ
 ーション]

後部保留型 (9例)：ウイスキー ウォーク マニユスクリプト ネットアイ テレフォン ボーナス
 ウルトラスパイ ヘルベツチン

単語型略語は「前部保留型」、「後部保留型」に分けられるが、どの類型も属しない語例「モルヒネ」もある。その形成について説明を加えたい。

『現代語辞典』(素人社、1924)や『最新現代用語辞典 大正14年版』(明光社、1925)などに収録されているこの略語の形成において、原形の最初のモーラと三つ目のモーラが保留された。その原形「モルヒネ」は麻酔剤の意味を表し、蘭語<morfine>から由来するものである。賢理著、宇田川裕庵重訳増註『舎密開宗』(1837~1847、須原屋伊八)をはじめ、多くの化学書・医学書は「莫^モ爾^ル比^ヒ涅^ネ」という漢字で「モルヒネ」を表記している。そして、「莫比」(「莫菲」)という漢字語も見られる。例えば、日本医史学会編『中外医事新報 第四百四十四號』(日本医史学会、1898.9)に「急性莫比及燐中毒ノ救急療法」という題目の文章が見られる。

漢語略語の形成において、四字熟語の最初の漢字と三つ目の漢字を取って略語を造るという省略パターンが存在する。例えば、江戸時期において、「上等白米→上白」や「番頭新造→番新」などの語例が見られる。そのため、「莫爾比涅」が「莫比」に略されることによって、略語「モヒ」が形成したことが考えられる。「モルヒネ」の形成はその漢字表記と関わっている可能性が高い。このような略語語例は1例しかなく、その形成もほかの略語と異なるであろう。

5. 複合語型略語の語例

複合語型略語の場合、原形は「前単語+後単語」の構成を持っている。略語化において、原形の前単語を丸ごと取って造ったものを「前単語保留型」(「ガイド・ブック」の類)とし、後単語を丸ごと取って造ったものを「後単語保留型」(「コンテンツ・ミルク」の類)とする。

前単語と後単語のモーラをそれぞれ取って結合させて造ったものを「前後保留型」とする。「セ^セコ^コン^ンド^ド・ハン^ンド」は典型的な「前後結合型」の語例であり、原形を構成する前単語の最初の2μ「セコ」と後単語最初の2μ「ハン」が結合して形成したものである。「オート・バイ^シクル」の形成は「セ^セコ^コン^ンド^ド・ハン^ンド」とやや異なるが、原形前単語の最初の3μ「オート」と後単語最初の2μ「バイ」が結合して形成したものと見なすことができる。つまり、結合という点から見ると、「オート・バイ^シクル」のような略語も「前後結合型」に属すると考えられる。

丸ごとではなく、前部語の一部分あるいは後部語の一部分を取って造った語を「部分抽出型」(「アパートメント・ハウス」、「スイート・ポテト」の類)とする。

複合語型略語の語例は以下のようなものがある。

(5) 明治・大正期の辞書から抽出したもの：

前単語保留型 (42例)：アイボリー^{リー}・ナツト アネロイド^{イド}・バロメーター アpartment^{メント}・ハウス アンクル^{クル}・エスケープメント エレヴエーター^{ーター}・レールヴェー オーバー^{バー}・コート [オーヴァー^{ヴァー}・コート] オート^{ート}・モビル オリピック^{ピック}・ゲーム カーボン (carbon paperの略) ガイド^{イド}・ブック コーチ^{ーチ}・ヤード コール^{ール}・マネー [コール^{ール}・マネー] コール^{ール}・ローン サード^{ード}・クラス サード^{ード}・ベース ショート^{ート}・ストップ スクリュー^{ュー}・プロペラー ステーム^{ーム}・パイプ ステロ^{エロ}・タイプ センター^{ーター}・フィルター タングステン^{ステン}・ランプ ダブル^{ブル}・カラ ニューズ^{ューズ}・ペーパー ネーブル^{ェブル}・オレンジ [ネーブル^{ェブル}・オレンジ] ネット^{ェット}・ブライズ ノート^{ート}・ブック パス^{ース}・ボール パツキング^{ツキング}・ペーパー バツ

ク・グラウンド[バック・グラウンド] ハンチング・キャップ ブリユー・ストックキング フロック・コート ブル・ドッグ ベー
ス・ボール ホーディング・ハウス ホーム・ベース ホームラン・ヒット ポリス・マン モーニング・コート ラフ・
ペーパー ランニング・レース レイン・コート[レーン・コート]

後単語保留型 (18例) : ドライ・クリニング ブッキング・クロース ルーデ・サツク ビオロン・セロ [ヴィオロン・
セロ、ヴァイオリン・セロ] デット・マスク[デッド・マスク、デツト・マスク^{註6}] ライテング・タブレット[ライティング・
タブレット] ビフ・テキ ルチプライド・バイ アウト・フィールド ニュース・ペーパー [ニュース・ペーパー] ゲ
ラス・ペーパー サンド・ペーパー ホウゴロウ [ホーゴロー] (strus hogerの略) アンフェア・ボール ガス・
マントル ツウイング・ミシン コンデンス・ミルク マスク・メロン

前後結合型 (6例) : オート・バイ^{シクル} [オート・バイ^{スクール}] セCOND・HAND セCOND・チャンピオン
ビフ・カツレツ ビフ・ステッキ プロレタリア・ブルジョア

部分抽出型 (6例) : アルミニウム・ブロンズ キネマト・グラフ ゴロフ・クレム ポプラス・アルバ インク・ルラ
スイート・ポテト

(6) 昭和前期の辞書に初出したもの :

前単語保留型 (63例) : アート・ペーパー アース・アンテナ アイス・クリーム アフターヌーン・ドレ
ス インクライン・プレーン インターカレッジ・ユート ヴォーカル・ミュージック エバーシヤープ・ベンシ
ル オープン・カー オフセット・プリンチング カルシウム・カーバイド クロックスワード・バズル クロール・
ストローク グリル・ルーム ケーブル・グラム コミック・オペラ コンテ・クレヨン サイレント・ピクチュア サブ・
プレーヤー シヤワー・バス ショット (shot throwingの略) シール・スキン ジャズ・バンド [ジャズ (jazz
bandの略)] シングル・ヒット シングル・キャッチ ステイーム・ヒーター ストレート・ボール スナップ・ショ
ット スプリント・レース セカンド・ベース ソフト・ハット ダンナ (梵語Danna-patiの略) チョップ・スト
ローク テキサス・リーガー トレーニング・パンツ ドロップ・キック ドロウンウオーク・レース ニック・ネーム
ハイポー・サルファイト バント・ヒット ハンドル・レース ハイハドル・レース バック・ガード ファースト・
ベース ファイナル・ラウンド ファンシーウエースト・コート フィニッシュ・ライン フォアハンド・ストロ
ーク フォト・グラフ フライ・ボール ブロークン・イングリッシュ プレー・ボール プレスト・ストローク ベース・ヒ
ット ホワイト・スレーヴ マラソン・レース ライト・フィルター リレー・レース ルンペン・プロレタリア レフト・フ
ィルター ロング・ショット ローハドル・レース ワンピース・ドレス

後単語保留型 (29例) : クロース・アツプ サロン・アンデパンダン キヤメラ・アングル オルガニザチオン・エシ
エリツピ バティング・オーダア チュウイン・ガム オール・スター・キヤスト プレー・グラウンド アイス・クリ
ム フォト・グラビュア[フォト・グラヴィア] ランチー・コーチャー イン・ゴール ホップ・ステツプ・ジャンプ
グラウンド・スタンド[グラウンド・スタンド] ランプ・スタンド メンタル・テスト シート・ノック ミント・パー

^{註6} 辞書『新しい言葉は何でもわかる』には「デツト・マスク」という語例が見られるが、これは恐らく誤植であろう。他の辞書において、「デット・マスク」や「デッド・マスク」しか見られない。

パウダー・パフ ゴールデン・バット ミュージカル・バンド アイス・ピツケル セーフティ・ヒット カメラ・ブース
 ビッチャー・プレート ブラック・ボード フレンチ・ホルン ドア・マット インク・ルーラー

前後結合型 (17例) : アジ_テーティング・プロ_バガンダ アジ_テート・ポイント [アジ_テーティング・ポイント] セ_ラー・
 パンッ ゼネ_ラル・スト_ライキ [ジエ_ネラル・スト_ライキ] ハン_ガー・スト_ライキ バス・コン_トロー プロ_レタリア・
 デモ_クラシー モ_ダーン・ガ_ル モ_ダーン・ボ_イ ロケ_ション・ハン_ティング ゼロ・ゲ_ーム イン・ド_ロップ
 ノー・ズ_ロース ポリ_ス・メン テクニ_ク・カラ_ー ラン_ナー・ア_ウト バンク_ロフト・タイ_プ

部分抽出型 (8例) : アパ_ート_メント・ハウ_ス オイル_カラー・ベ_イン_ティング デ_パー_ト_メント・ストア_ー ネ_ガティ_ヴ・フ
 ィル_ム ハイ_ポサル_ファイト・ソ_ーダ ポ_ジティ_ヴ・フ_ィル_ム ポリ_ス・マ_ン マイ_クロ_・フ_ォーン

6. 略語化のレベルについて

略語形成において、「モーラレベルの略語化」と「語レベルの略語化」が存在することが明らかである。

「モーラレベルの略語化」に属するのはすべての単語型略語、複合語型略語の「前後結合型」及び複合語型略語の「部分抽出型」である。これらの略語の原形は略語化において語形分解が起こっている。語形分解というのは語レベルの原形がモーラレベルに分解することである。例えば、「フランネル→ネル」において、原形「フランネル」は後部モーラ「ネル」しか残されず、語形が分解した。複合語型略語「セ_コンド・ハン_ド→セ_コ・ハン」において、複合語を構成する前単語「セ_コンド」と後単語「ハン_ド」はいずれも語形が分解した。

「語レベルの略語化」に属するのは複合語型略語の「前単語保留型」と複合語型略語の「後単語保留型」である。語レベルの略語化において、原形を構成する単語は語形の分解が起こらず、語形保持をしている。例えば、「ガイ_ド・ブ_ク→ガイ_ド」、「コン_デンス・ミ_ルク→ミ_ルク」において、残された「ガイ_ド」と「ミ_ルク」はいずれも語レベルのものであると考える。

このように、原形が語形分解するのであれば、その略語化は「モーラレベルの略語化」とする。一方、「語レベルの略語化」において、原形は語形が分解せず、語形保持している。原形の語形が保持するか分解するかは略語化のレベルを判断する基準である。

7. 近代語における単語型略語の形成

余 (2019) は明治・大正期において単語型略語の形成について分析を行い、四つの結論をまとめた。

結論 1 : 明治・大正期の単語型略語において、前部保留型は無標であり、後部保留型は有標である。

結論 2 : 原形の 2σ を取って単語型略語を作るのが主流である。

結論 3 : 人々の言語意識の中で、二分することができる構成を持つ「言語意識上の複合語」は存

在する。この類に属する外来語は3σ以上の長さに略される傾向がある。

結論4：接辞を持つ単語型外来語はその略語化において、語構成的に「接頭辞+語基」あるいは「語基+接尾辞」のように分節されることがある。このような分節は略語化に影響を与える。

語例を見ればわかるように、昭和前期の単語型略語の形成は明治・大正期と同じ特徴を持つていると考えられる。近代語における単語型略語の形成について7.1節～7.3節をもって説明する。

7.1. 無標の「前部保留型」と有標の「後部保留型」

近代において、単語型略語の中で、「前部保留型」の語例は八割以上を占め、無標であることが明らかである^{注7}。「前部保留型」が無標である原因について、やはり前部を保留したほうが原形を復元しやすいことが考えられている。鈴木（1996）は略語の形成において、後を略すことが多いのは「前半部を残すので復元可能性が高いためである」と述べている。つまり、「前部保留型」が原形の前部を持っているため、人々は「前部保留型」略語を見ると、元の語を想起しやすいことである。

それに対し、「後部保留型」は数が少なく、有標であると考えられる。その形成は三つの原因が考えられる。

(一)、原語が外国語略語であり、それを転写したものが存在する。昭和前期の語例「ネックタイ」、「テレフォン」はその例である。外来語「ネックタイ」は<英語necktie>から由来したものである。英語の中で、<necktie>は既に<tie>に略されている。「ネックタイ」は<英語tie>を転写したものであると考えられる。同じように、<英語telephone>は<phone>に略されている。「テレフォン」は<英語phone>を転写したものである。

(二)、一部の「後部保留型」略語は隠語の性質を持っている。「タイピスト」、「コンミッション」、「スパイ」などの略語は隠語の性質を持っていると考える。ある語を隠語の性質を持たせるため、人々はその語の前部ではなく、敢えて後部を保留し、「後部保留型」略語を造る。

(三)、同音衝突を避けるために造られた「後部保留型」の語例もある。原語を「前部保留型」に略すと、ほかの語と同音衝突が起こりうるため、「後部保留型」の略語が造られた可能性が考えられる。詳しい考察は余（2019）を参照されたい。

7.2. 主流形式の2σ略語

前部を保留するか後部を保留するかということが決まった後、何音節何拍を取るかは次の問題になる。結論から言うと、原形の2σを保留して略語形を造るのが主流である。その中で「2σ、2μ」構成の語例は最も多く、「2σ、3μ」構成の語例も多数存在する。

^{注7} 「原形と不对応の略語」が本発表の主な分析対象となっていないため、第7節以降の統計は「原形と不对応の略語」語例のデータを含んでいない。

一方、3σ以上の長さを持つ略語も存在する。これらの語例なぜ2σを保留しなかったかについて主に三つの原因が考えられる。

(一)、原語が外国語略語であり、それを転写した語例の存在。例えば、明治・大正期の略語「インスタ」は<英語inst>を転写したものである。英語の中で、<instant>は<inst>に略されているため、<inst>の転写である「インスタ」も<instant>の略語形になる。昭和前期の語例「メフィスト_{フエーレス}」もその一例である。英語の中で、悪魔の名前を表す<mephistopheles>は既に<mephisto>と略されたため、略語「メフィスト_{フエーレス}」は<英語mephisto>をそのまま転写したものである。このような語例は略語造語法に従っていないため、必ずしも2σの長さを持つとは限らない。

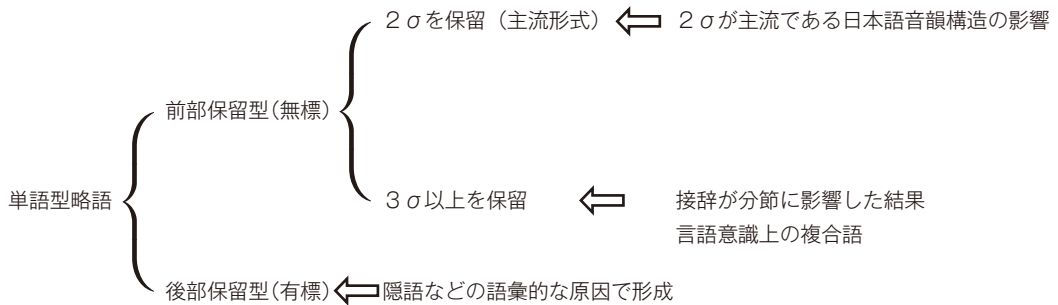
(二)、言語意識上の複合語の存在。人々の言語意識の中で、二分することができる構成を持つ「言語意識上の複合語」は存在する。例えば、「コールタール」という外来語は単語型に見えるが、その原語である<英語coaltar>が<coal + tar>の構成を持っているため、カタカナ語「コールタール」も「コール+タール」の構成を持っていると見なすことができる。このような構成はあくまでも言語意識上の認識であり、「ガイド・ブック」のような真の複合語と異なる。収集した語例の中で、このような言語意識上の複合語の略語化過程では略語形が3σ以上の長さを取る傾向が見られる。

(三)、接辞による分節が略語化への影響。一部の外来語は「語基+接辞」あるいは「接辞+語基」のように分節できる。このような分節は略語化に影響することがある。例えば、明治・大正期の語例「エンゲーチ_{メント}」(<英語engagement>)は語基にあたる「エンゲーチ」と接尾辞にあたる「メント」に分けられる。前部保留型が主流形式であるため、略語化される際に、前部の「エンゲーチ」が保留され、後部の「メント」が削除された。「タイピスト」(<英語typist>)は語基にあたる「タイ」と接尾辞にあたる「ピスト」に分けられる。略語を造る際に、隠語の性質を持たせるため、敢えて後部の「ピスト」を保留したと考えられる。昭和前期の語例でも、「アパート_{メント}」などの略語化においても、同じような現象が観察される。

7.3. 単語型略語の形成上の特徴

分析を踏まえ、単語型略語の形成を図式化すると、以下ようになる。

図1 近代語における単語型略語の形成



外国語略語をそのまま転写したものを除き、「前部を保留すること」と「2σの長さを保留すること」はこの時期において単語型略語形成の二大原則であるが、様々な原因で略語は原則に従わずに造られたこともある。

単語型外来語は略される際に、「前部保留型」の略語に略されるのが殆どであり、無標である。「後部保留型」略語は主に隠語の性質を持たせることや同音衝突を避けることなど、語彙的な原因で造られたものである。

「前部保留型」は大きく2σの略語と3σ以上の略語に分けられる。その中で、2σの長さを持つ略語は主流形式である。日本語は2σを持つ語彙が多く存在している。玉村(1989)は統計的には4音節の語が多いということを述べているが、「あか」、「しろ」、「みる」、「よむ」など、基本的な和語は2σを持つことが多く、「学校」、「指示」、「集合」などのような2σ構成の漢語も多い。2σの略語は主流になるのも人々が外来語を日本語の音韻構造に当てはめた結果であろう。

一方、一部の単語型外来語は言語意識上に複合語の構造を持っていると考えられることがあり、接辞を持つ派生語の構造を持っていると考えられることもある。これらの単語型外来語は3σ以上の長さを持つ略語に略される傾向が見られる。

8. 近代語における複合語型略語の形成

複合語型略語の形成について、五つの結論がまとめられる。

結論5：近代において、複合語型外来語は主に「語レベルの略語化」で略されていた。「前単語保留型」という省略パターンは生産性が強く、最も主流の形式である。

結論6：複合語型外来語は「修飾部+意味主要部」の意味関係を持っており、ある語彙グループに属する下位概念の一つにあたる場合は多い。このような意味関係を持つ語は「前単語保留型」に略される傾向が強い。

結論7：「後単語保留型」略語の中で、一部の語例は外国語略語を転写したものである。そのような語を除いて、「後単語保留型」略語の形成原因について、「原語の意味主要部を保留して略語形

を造る」という仕組みが存在することが考えられる。

結論8:「モーラレベルの略語化」に属する「前後結合型」略語は主な形式が「 $2\mu + 2\mu$ 」である。根本的に言うと、「前後保留型」という省略パターンの存在は漢語略語の造語法に影響された結果であると推測する。

結論9:「部分抽出型」略語の中で、外国語を転写したものを除き、語彙的な原因で形成したもの、二段階の略語化で形成したものがある。

近代語における複合語型略語の形成について、8.1節～8.6節で説明する。

8.1. 主流の「語レベルの略語化」

略語形成における「語レベルの略語化」と「モーラレベルの略語化」について既に述べたが、複合語型略語の中で「語レベルの略語化」で造られた語例は圧倒的に多いことが明らかである。それに対し、「モーラレベルの略語化」で造られた語例は数がかなり少ないと言えよう。

殆どの複合語外来語は「前単語+後単語」の構成を持っている^{注8}。単語型外来語と異なり、複合語型外来語は語構成上に既に分節されている。略語化される際に、前単語を保留するか後単語を保留するかは当時の人々にとって主流の省略パターンになっていた。これは「語レベルの略語化」が無標である原因だと考えられる。

8.2. 主流形式の「前単語保留型」

明治・大正期において、「前単語保留型」は42例（全体の約58%）があり、昭和前期において、「前単語保留型」は63例（約54%）がある。数から見ると、「前単語保留型」の省略パターンで造られた語例は半分以上を占めており、複合語型略語の主流形式であることが分かる。つまり、複合語外来語を構成する前単語を保留して略語を造ることは最も流行っていた。

その原因について、一つは既に述べた単語型略語の「前部保留型」の形成原因と同じく、前部（前単語）を保留したほうが原語を復元しやすいということが考えられる。

もう一つの大きな原因は多数の複合語型外来語が持っている「修飾部+意味主要部」の意味構造と関わっていると可能性が高い。

複合語において、前単語と後単語とは様々な意味関係を持つことが可能であるが、「修飾部+意

^{注8} 「ホーム・ラン・ヒット」のような三つの語で構成される複合語型外来語は存在するが、この語は[[ホーム]・[ラン]]・[ヒット]]のように、階層があると考えられる。そのため、この語は「ホームラン・ヒット」の構成を持っていると見なすことができる。

味主要部」という修飾関係を持つ場合は多くある^{注9}。例えば、野球の三塁を意味する「サード・ベース」は前単語「サード」が後単語「ベース」を修飾・限定し、一塁でも二塁でもなく、三塁であるということを表す。手引き、案内書の意味を表す「ガイド・ブック」は前単語「ガイド」が案内の意味であり、後単語が本の意味である。「ガイド」は「ブック」を修飾し、「ブック」の用途を表す。

「修飾部+意味主要部」を持つ複合語型外来語は往々にしてある語彙グループに属しており、一つの下位概念になっている。例えば、「フロック・コート」、「オーバー・コート」、「モーニング・コート」、「レイン・コート」のような「コート」に関する語彙グループが存在する。「コート」は上位概念であり、「フロック・コート」などは下位概念であり、「コート」一種類に過ぎない。勿論、「コート」という上位概念に属する下位概念は以上の四つだけでなく、もっと存在すると考える。「ガイド・ブック」と「ノート・ブック」も「～ブック」の語彙グループに属し、「ブック」の下位概念になっている。「アパートメント・ハウス」と「ボーディング・ハウス」は「～ハウス」のグループに属し、「～ハウス」の下位概念になっている。「ファースト・ベース」、「セカンド・ベース」と「サード・ベース」は野球用語で、「～ベース」のグループに属している。「アフターヌーン・ドレス」と「ワンピース・ドレス」は「～ドレス」（「～ドレス」）のグループに属しており、その下位概念になっている。

このような意味構造を持つ複合語型外来語は略語化される際に、「前単語保留型」に略される傾向は強い。この現象について、窪菌（2002）は例を挙げながら説明している。

(7)（筆者注：複合語短縮の一つ大きな原理は）「修飾部となる要素を残せ」という要請である。（中略）たとえば食堂で注文する際に「定食」と言ったのでは意味をなさないことが多い。「とんかつ定食」「中華定食」「トンベイ定食」等々、多種類の定食メニューがあるために、後部要素（主要部）の「定食」だけ言ったので不十分ということになる。つまり、このような言語使用の場面では複合語の修飾部が意味の区別に役立っているのである。

窪菌（2002）が指摘しているように、「とんかつ定食」、「中華定食」と「トンベイ定食」は同じく「～定食」のグループに属している。意味主要部である「定食」が繰り返して出現しているが、修飾部である「とんかつ」、「中華」、「トンベイ」が意味の区別に役立っている。この定食屋での注文の仕方はあくまでも現場的なものであるが、外来語略語の形成において似たような規則は働いていると考えられる。

略語化過程において、人々はコミュニケーションの中で繰り返して出現するが、意味の区別に役立たない「意味主要部」を削除し、意味の区別に大きな役割を果たしている「修飾部」を保留する。

^{注9} 斎賀（1957）は合成語の意味的關係を六種類に分けている。「修飾關係」のほか、「並立關係」「主述關係」「補足關係」「補助關係」「客体關係」がある。「修飾關係」は「前部分が後部分の意味を修飾する關係である（国会-議員、映画-監督、始発-列車、平和-国家、肉-料理、一部-学生など）。修飾要素は常に被修飾要素に先行する。この修飾のしかたには、様々な種類があつて、決して単純ではない」と説明されている。

これは「修飾部+意味主要部」の意味構造を持つ外来語が「前単語保留型」に略されやすい原因であろう。

8.3. 「後単語保留型」の形成

「後単語保留型」の中で、一部の語例は外国で既に短縮が行われており、それを転写したものである。例えば、英語の中で、<newspaper>は<paper>に略されている。略語「ニューズ・ペーパー」(「ニューズ・ペーパー」)は<英語paper>を転写したものである。<英語violon cello>は<cello>に略されている。略語「ビオロン・セロ」(「ヴィオロン・セロ」, 「ヴァイオロン・セロ」)は<cello>を転写したものである。<英語gas mantle>は<mantle>に略されている。略語「ガス・マントル」は<mantle>を転写したものである。

しかし、かなりの「後単語保留型」略語の形成原因はやはり「修飾部+意味主要部」の意味構造にあると考える。略語化において、意味主要部を保留する傾向も存在することが考えられる。例えば、略語「ミシン」は原形が「ソウイング・ミシン」(<英語sewing machine>)である。「ソウイング・ミシン」の中で、「ミシン」は<machine>から由来し、「機械」の意味であり、複合語の意味主要部である。「ミルク」は「コンデンス・ミルク」の略語である。原形の中で、前単語「コンデンス」は「濃縮」の意味であり、後単語「ミルク」を修飾している。被修飾部の「ミルク」は複合語の意味主要部に違いない。「デッド・マスク」は後単語保留型の省略パターンで「マスク」に略される。原形の中で、「デッド」は<英語dead>に対応し、修飾部である。後部の「マスク」は「仮面」の意味を持ち、意味主要部である。その他、「ブッキング・クロース」、「ライテング・ダブルレット」、「グラス・ペーパー」、「サンド・ペーパー」、「ミュージカル・バンド」などの外来語はいずれも後単語である意味主要部が略語形として保留されたのである。

なぜ「意味主要部を保留する」傾向が存在するかというと、やはり、意味主要部である「後単語」だけでも意味が通じるからだと考える。前で引用した窪菌(2002)の例を借りて説明する。食堂で注文すると、食堂のメニューに「とんかつ定食」「中華定食」「トンペイ定食」などの料理がある場合、客は「定食」を言っても意味が通じないため、「とんかつ定食」を「とんかつ」、「中華定食」を「中華」、「トンペイ定食」を「トンペイ」を略すしかない。が、食堂のメニューには「やきそば」、「カレーライス」があり、定食類が「とんかつ定食」しかない場合、客は「とんかつ定食」を「定食」に略して注文しても意味が通じることができる。

つまり、文脈や使用場面によって、「修飾部+意味主要部」の「意味主要部」だけでも原語を想起させることができる。そのため、「意味の主要部を保留する」傾向は存在し、この傾向によって造られるのは「後単語保留型」略語である。

8.4. 「前後結合型」の形成

「前後結合型」略語は23例がある。その中で、「 $2\mu + 2\mu$ 」構成の語例は16例があり、全体の約70%を占めている。「前後結合型」において、「 $2\mu + 2\mu$ 」は最も主流の構成であると言える。

既に述べたが、 2σ の略語は単語型略語の主流形式である。そして、 2σ 略語の中でも、 2μ 構成の略語は最も多く存在している。そのため、「前後結合型」を造る際に、原形の前単語と後単語から 2μ ずつ取ることは理解できる。

日本語の中で、特に漢語の語彙は「 $2\mu + 2\mu$ 」の構成が多く存在しており、「 $2\mu + 2\mu$ 」という構造は音韻上の安定性がある。実は、漢語の略語の中でも、「前後結合型」と似たような略語も存在している。例えば、『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂、1985）は「安心立命」（あんりゅう）などを収録しており、『江戸語辞典』（東京堂、1991）も「上等白米」（じょうはく）、「番頭新造」（ばんしん）を収録している。これらの漢語略語は明治期より前の時期に既に造られ、その原形はいずれも「前単語＋後単語」のような構成を持っている。略される際に、前部語の一文字（ 2μ ）と後部語の一文字（ 2μ ）を保留し、結合させる。つまり、「 $2\mu + 2\mu$ 」の形式で複合語を略すのは日本語の中で元々存在していた省略パターンである。そのため、近代語において「 $2\mu + 2\mu$ 」を主流形式とする「前後結合型」の存在は漢語の影響を受けたと考えられる。

一方、以下の例外的な語例も存在する。

(一)、「オート・バイスクル」（「オート・バイシクル」）について。「オート・バイ」は「 $3\mu + 2\mu$ 」の構成である。「オート」は<英語 auto>から由来し、「自動的」の意味を表す。つまり、「オート」は形容詞の性質を持ち、形容詞として使われていると考えられる。そのため、略語化過程において、形容詞として「オート」は丸ごと残された可能性がある。後単語「バイシクル」は主流形式に従い、最初の 2μ を取る。「オート」と「バイ」が結合して「オート・バイ」になる。

(二)、「モターン・ボー」、「モターン・ガー」について。「モ・ボ」と「モ・ガ」は昭和前期の辞書から集めたものであり、当時の流行語である。そして、人々が取って一般の造語法を従わずに造った流行語はよく見られる。「モ・ボ」、「モ・ガ」も同じように、「 $2\mu + 2\mu$ 」という「前後結合型」の主流形式に従わず、最初の 1μ を取って語を極端に短縮する。英語では、複合語を構成する単語の頭文字を取って造られる略語はある。明治・大正期及び昭和前期の辞書に「I.O.Y」（<英語 i owe you>の略）や「W.C.」（<英語 water closet>の略）などのような英文字略語が見られる。「モ・ボ」のような語例の形成はこの英語の省略パターンに影響された可能性がある。

(三)、「テクニック・カラー」、「ランナー・アウト」などについて。二つの語はいずれも英語を転写したものである。「テクニック・カラー」は<英語 technicolor>、「ランナー・アウト」は<英語 run out>を転写したものである。

以上のように、例外的な語例は存在するが、全体から見ると、「 $2\mu + 2\mu$ 」構成は「前後結合型」の主流形式ということは明らかである。

8.5. 「部分抽出型」の形成

「部分抽出型」の形成原因も様々あり、個別で考察する必要がある。

(一)、漢字表記の影響。「ゴロフ・クレン」は漢字表記の影響で造られた語例であると考えられる。江戸期において既に存在したこの語について、『言海』は「ゴロフ・クレン(名) 呉羅服連〔蘭語、Grof(粗) grein(駝毛布)ノ訛〕西洋舶来ノ毛織物(中略)略シテ、呉羅」と説明している。『江戸語辞典』は以下のように説明している。

・ごろふく〔呉紹服〕呉紹服連(蘭語、)の略。舶来の毛織物、元来は駱駝の毛、のちには羊に綿麻の糸を入れて織ったもの。江戸では、「ごろふく、ごろ」、上方では「ふくりん」といった(後略)。

『江戸語辞典』では「ごろふくりん」、『言海』では「ゴロフ・クレン」という発音の差が見られるものの、<蘭語 grof grein>は早い時期に日本語に輸入され、漢字で表記されたことがわかった。略語「ゴロ」は「呉羅服綸→呉羅」(「呉紹服連→呉紹」)という漢語の略語化で形成したと考えられる。

(二)、外国で略された形があって、それを受け入れたもの。例えば、英語の中で、<kinematograph>は<kinema>に略されている。略語「キネマト・グラフ」は<kinema>を転写したものである。同じように、「マイクロ・フォン」は<英語 mike>を転写したものであると考えられる。

(三)、二回の略語化を経て造られたもの。例えば、「スイート・ポテト」は「スイート・ポテト→ポテト→ポテ」のように、二つの別々の略語化によって略語化された。「スイート・ポテト→ポテト」の第一段階は複合語型略語の「後単語保留型」省略パターンであり、「ポテト→ポテ」の第二段階は単語型略語の略語化に属する。第二段階において、「ポテト」の前部2μ「ポテ」が保留され、略語形になる。『日本国語大辞典 第二版』は「ポテト」という語について、ジャガイモなど四つの意味を挙げている。その中で、「(「スイートポテト」の略語) サツマイモ」という意味が見られる。つまり、「スイート・ポテト→ポテト」という第一段階の略語化は実際に存在し、確認できる。これは「スイート・ポテト」が二段階の略語化をされた証拠の一つである。

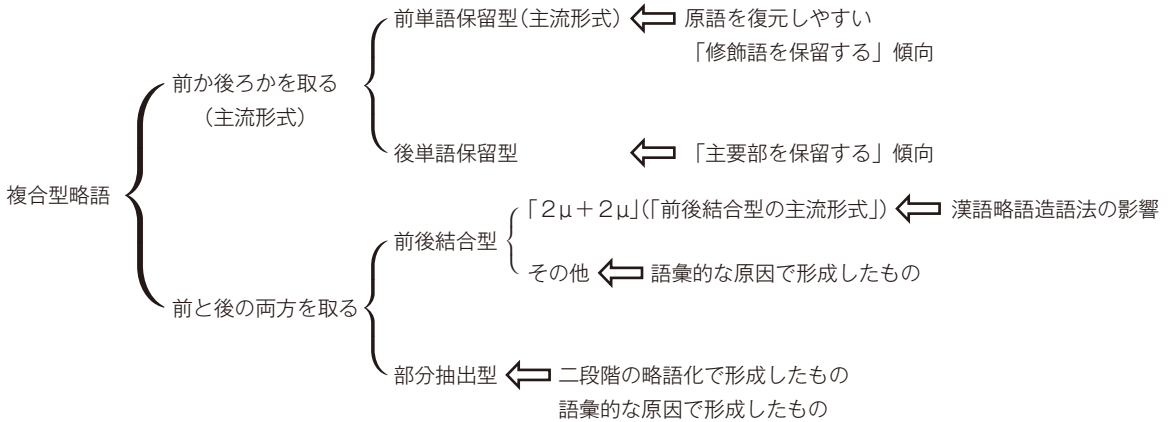
同じように、「アパートメント・ハウス」は「アパートメント・ハウス→アパートメント→アパート」のように造られたと考える。「アパートメント・ハウス→アパートメント」の第一段階は複合語型略語の「前単語保留型」省略パターンであり、「アパートメント→アパート」の第二段階において、原形が接尾辞が持っているため、「アパートメント」は「アパート+メント」のように分節され、「アパート」は保留されて、略語形になった。

その他、「インク・ルーラー」、「デパートメント・ストアー」、「ネガティブ・フィルム」、「ハイポサルファイト・ソーダ」、「ポジティブ・フィルム」、「ポリスマン」などの語も二段階の略語化によって造られた可能性があると考えられる。

8.6. 複合語型略語の形成上の特徴

分析を踏まえ、複合語型略語の形成を図式化すると、以下のようになる

図二 近代語における複合語型略語の形成



以上のように、外国語をそのまま転写したものを除き、複合語型略語の形成において、「前か後かを保留すること」、「前単語を保留すること」、「 $2\mu + 2\mu$ 」で「前後結合型」を造ること」という三つの原則があると考えられる。

近代において、複合語型外来語が略される際に、「前か後かを保留する」（いわゆる「語レベルで略す」）傾向が強く、主流形式である。その語例の中で、「前単語保留型」と「後単語保留型」がある。前部を残すほうが原形を復元しやすいこと、修飾部を保留する傾向があることなどの原因により、「前単語保留型」は数が非常に多く、複合語型略語の主流形式である。「後単語保留型」は語例が少ないが、主要部を保留する傾向で造られたと考えられる。

一方、この時期において、「前と後の両方を保留する」（いわゆる「モーラレベルで略す」）パターンで造られた略語はまだ少なく、「前後結合型」と「部分抽出型」という類型が見られる。「前後結合型」は漢語の略語省略パターンの影響を受け、「 $2\mu + 2\mu$ 」構成が主流形式である。「部分抽出型」は主に二段階の略語化で形成したと考えられる。

9. まとめ

本稿は明治・大正期と昭和前期の外来語略語を収集し、分析を行った。その結果、単語型略語の形成における「前部を保留すること」と「 2σ の長さを保留すること」の原則、複合語型略語の形成における「前か後かを保留すること」、「前単語を保留すること」、「 $2\mu + 2\mu$ 」で「前後結合型」を造ること」の原則が存在することが分かった。

外来語略語の造語法は時期によって変化していると考えられる。以上の原則はあくまでも明治・大正

期、昭和前期における外来語略語の形成上の特徴である。外来語略語の形成を明らかにするため、昭和前期以降に造られた語例を調査する必要がある。

参考文献

- 斎賀秀夫 (1957) 「語構成の特質」 斎藤倫明・石井正彦編 『日本語研究資料集 1-13 語構成』 (ひつじ書房、1997) 所収
- 惣郷正明・飛田良文 (1986) 『明治のことば辞典』 東京堂
- 田辺洋二 (1988) 「外来語の略語—カタカナ語とローマ字語—」 『日本語学』 7-10 明治書院
- 玉村文郎 (1989) 「語形」 玉村文郎編 「講座日本語と日本語教育 6 日本語の語彙・意味 (上)」 (明治書院、1989) 所収
- 鈴木俊二 (1996) 「外来語の略語の構造—音節・モーラ・フット・語—」 『国際短期大学紀要』 11 国際短期大学
- 窪菌晴夫 (2002) 『新語はこうして作られる』 岩波書店
- 窪菌晴夫 (2010) 「語形成と音韻構造—短縮語のメカニズム—」 『国語研プロジェクトレビュー』 No.3 国立国語研究所
- 太田聡 (2014) 「短縮語形成管見」 『異文化研究』 8 山口大学人文学部異文化交流研究施設
- 余澤涛 (2019) 「明治・大正期における外来語略語の形成—単語型略語を中心に—」 『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 48 岡山大学大学院社会文化科学研究科
- Itô, Junko (1990) "Prosodic minimality in Japanese." *CLS 26- II : Papers from the parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, pp.231-239

付記：

本稿は2020年度日本近代語研究会春季発表大会 (2020年5月15日～5月21日、Web上) での発表「近代語における外来語略語の形成について」をもとに、内容を修正・追加したものである。発表に際して貴重なご教示をくださった方々に感謝申し上げます。

